

抑うつを示す児童の社会的相互作用の行動観察-Sequential analysis による検討-

Sequential Analysis of Social Interactions among Depressed and Nondepressed Children

○ 竹島 克典*・松見 淳子**

Katsunori TAKESHIMA and Junko TANAKA-MATSUMI

(関西学院大学大学院文学研究科*・関西学院大学文学部**)

Department of Psychology, Kwansei Gakuin University

I. 目的

近年、子どもの抑うつが次第に注目されるようになってきた。子どもの抑うつは、対人関係の困難と強い関連があることが示されている。本研究の目的は、小学校における対人場面で、抑うつを示す児童がどのように行動し、仲間とどのように相互作用をしているかを検討することであった。そのため、観察1では抑うつを示す児童の自然遊び場面における行動観察を行った。観察2ではグループで問題解決課題を行わせ、抑うつを示す児童と仲間との相互作用を観察した。

II. 方法

対象児 公立小学校の5,6年生206名を対象にBirlson(1981)の子ども用抑うつ自己評価式尺度(Depression Self-Rating Scale for Children: DSRSC)の日本語版(村田・清水・森・大島, 1996)を実施し、カットオフスコア(16点)を超えた児童10名を抑うつ高群、カットオフスコアを超えなかった児童10名を対照群として選出した。

観察1 小学校の休憩時間における児童の行動観察を行った。行動観察は全ての対象児について、インターバル記録法を用いて、1回10minの観察を異なる日時に2回行った。対象児の行動は15sのインターバルで記録し、それぞれの対象児について合計20minの休憩時間場面の観察を行った。

行動の記録は、休憩時間に誰といるかについて、a) 独りである、b) 仲間といる、c) 仲間以外といるのコードで記録を行い、d) 相互作用の有無を記録した。

観察2 対象児1名と仲間2名からなるグループを設定し、問題解決課題を与えて、抑うつを示す児童と仲間との相互作用を観察した。10minの問題解決場面をビデオ撮影し、ディスカッションを行っている際の対象児の行動および仲間の行動の相互作用を記録した。

児童の行動の記録は、提案や質問といった“ポジティブ行動”、非難や拒否などの“ネガティブ行動”、

“反応無し”の3つのコードを用いて、対象児および仲間の全ての行動をコード化した。そして、対象児の行動に対する仲間の応答といった、行動の連鎖を分析するSequential analysisを用いて分析を行った。

III. 結果および考察

自然遊び場面 観察1の休憩時間の行動観察の結果をTable 1に示した。抑うつ高群の児童は対照群の児童と比べて、休憩時間に独りでいる時間が多く、仲間のそばにいても、仲間との相互作用が少ないことが明らかになった。

グループ問題解決場面 観察2のグループ問題解決場面における児童の相互作用のSequential analysisより、抑うつ高群の児童は対照群の児童よりも、ポジティブな働きかけをしたときに仲間からのポジティブな応答が起こりにくいことが明らかになった。さらに、抑うつ高群の児童は対照群の児童よりも、仲間からのポジティブな働きかけに対してポジティブな応答をすることが少なく、反応しない、関係の無い話をするといった行動が生じやすいことが分かった。このことから、抑うつ高群の児童と仲間との相互作用は、対照群の児童と仲間との相互作用と比べて、ポジティブな行動の相互交換が少ないことが明らかになった。

以上の結果より、抑うつを示す児童は、自然遊び場面、グループの問題解決場面のどちらにおいても、対人的文脈において、仲間への自発的で適応的な働きかけが少なく、環境から正の強化を受けにくい環境にいることが明らかになった。

Table 1

自然遊び場面における抑うつ高群および対照群の行動の平均インターバル生起率

コード	抑うつ高群(n=10)		対照群(n=10)	
	M(%)	SD	M(%)	SD
(a) 独り	24.13	27.48	0.63	1.35
(b) 仲間といる	72.35	29.70	98.25	2.44
(c) 仲間以外	3.63	8.63	1.13	2.08
(d) 相互作用有り	53.65	23.52	79.99	11.09